

現代イラク研究国際学会第2回大会の報告 (International Association of Contemporary Iraqi Studies, 2nd Conference)

山尾 大*

地域研究は、研究対象とする地域の固有性を丹念に抽出することにより、該当地域に対する理解を深めることに加えて、それに基づいて他地域の事例と比較することによって、普遍的な理論の構築にも貢献しようとするものである。したがって、対象地域への理解が妥当なものであるか常に問い続ける必要がある。独断的な理解に陥らないためにも、地域研究者にとって、対象地域の研究者と議論し、意見を交わすことは極めて有益であり、研究の発展に欠かせない。

現代イラク研究国際学会 (International Association of Contemporary Iraqi Studies) の第2回大会は、上述のような対象地域の研究者との意見交換のための好機であった。本大会の最大の特徴は、イラクの主要大学であるバグダード大学やバスラ大学、ムスタンスィリーヤ大学、ティクリート大学などから多くのイラク研究者を招聘し、外部のイラク研究者と議論を交わしたことであろう。

イラク国内の研究者を招聘するために、ヨルダンのアンマンが開催地に選ばれ、アンマン郊外にあるフィラデルフィア私立大学で、2007年6月11～13日に開催された。イラク国内の混乱、悪化し続ける治安、ヨルダン当局のイラク人に対する厳しい入国審査などの状況から、イラク人研究者の参加が懸念されたが、全員無事に到着することができた。

同大会の実行委員長は、英国エクセター大学のカーミル・マフディー教授が務め、開会式にはヨルダンのハサン・ビン・タラール王子が出席した。彼はイラク及び中東地域の平和と安定を希求し、イラク研究の発展を激励するスピーチを行った。

もうひとつ特徴的なこと、それは、イラク内外の研究者が参加し、英語とアラビア語の両方が使用言語に用いられたことであろう。同大会は、双方の言語でのセッションを合わせて16のセッションが設けられ、約100人の参加者のなかから在イラク研究者21人、イラク国外の研究者26人が各人の研究成果を報告した。

実施されたセッションは、次の通りである。「イラク人避難民と社会ネットワークⅠ」、「イラク人避難民と社会ネットワークⅡ」、「今日のイラクにおける文化と教育」、「イラクと紛争：アラブ・イスラームの視点から」、「現代イラク経済」、「イラク近代史の中の政治的動員・アイデンティティーと記憶」、「2003年以降のイラク情勢：占領と反乱の文脈から」、「現代イラクの宗教・国家・社会、イラクにおける社会文化の発展Ⅰ」、「現代イラクの宗教・国家・社会、イラクにおける社会文化の発展Ⅱ」(バイト・アル＝ヒクマ研究プロジェクト)、「現代イラクの経済と石油」(バスラ大学アラブ湾岸研究センター研究プロジェクト)、「イラク各都市の社会と英国の占領1914-1920」(バグダード大学・ムスタンスィリーヤ大学・ティクリート大学研究プロジェクト)、「文学と芸術の役割と文化保全」、「イラクにおける米国の役割」、「イラク研究：資料・方法論・ディレンマ」、「国際政治と国際法の観点から」、などである。

以上からわかるように、現在の、とりわけイラク戦争以降の問題に多くの関心が集まった。イラク人難民に関するパネルでは、ヨルダンとシリアにおけるイラク人難民の現状にかんする報告

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
日本学術振興会特別研究員 (DC)

が行われた。大量に押し寄せるイラク人難民に対処できなくなったヨルダン政府が受け入れを制限したため、イラク人難民の中心的な受け入れ先がシリアに変わったという。しかし、イラク人難民が移住先の社会経済構造に与える影響は大きく、移住先での生活も困難を極める。受け入れ先の住宅価格の法外な値上げや、既存の商業ネットワークとの競合の発生など、問題は枚挙にいとまがないことは、筆者自身が行った調査によっても確認されている(2007年2月のシリアにおける調査による)。さらに本稿執筆中の2007年9月10日にはシリア政府がイラク人に対してビザの取得を義務付けた。事実上の入国制限である。

加えて、2006年のサーマッラーにおけるアスカリー廟爆破事件以降の宗派対立の波が、移住先にも押し寄せている(2006年2月22日の1回目のアスカリー廟爆破以来、スンナ派とシーア派の抗争という形をとって表面化する宗派対立に伴い、治安が急激に悪化していった)。同パネルにおいても、宗派別の住み分けが生じていることが明らかにされた。筆者の現地調査でも、シリアにおけるイラク人難民は、スンナ派とシーア派ではっきりと住み分けしていることが確認できる(2007年2月・8月のシリアにおける調査による)。

イラク情勢が日に日に悪化する中で(大会の最終日に当たる6月13日には、サーマッラーのアスカリー廟が再び攻撃の対象となり、ミナレットが爆破された。今回の事件も対立の激化を助長することになるであろう)、米軍の占領や治安に関する問題、および石油、イラク避難民、米国の政策が大きく取り上げられたことは、理の当然である。この他のテーマに関しても、若い研究者を中心に、歴史や記憶の読みなおしに関する分析が試みられるなど、実証的で興味深い報告がなされた。また、日本に招聘された経験があるバグダード大学のM.マフムード助教授を中心とする歴史研究のチームによる「イラク各都市の社会と英国の占領1914～1920」は、本大会アラビア語セッションのひとつの目玉となった。それは次のような理由による。

戦後のイラクを再建するために取り組むべき焦眉の課題のひとつには、イラク・ナショナリズムの問題がある。宗派対立や内部分裂が繰り返される現在のイラクにおいては、国家をひとつにまとめ上げ、国民統合を進めることが緊要であり、そのためにいかなる統合の原理を掲げるかにかんして、暗中模索の状態にあるとも言える。

言い換えると、現在、歴史や記憶の再検証が盛んに行われているのである。その中でカギとなる歴史的な事件が、イラク・ナショナリズムの萌芽に位置付けられてきた1920年暴動である。マフムード助教授を中心とする研究チームは、英国の占領政策とそれに対する抵抗運動の中で、イラクの各都市がいかなる役割を果たし、同時に占領と抵抗運動の中で各都市の社会構造がどのような変化を遂げたかを、歴史資料に基づいて分析した。

このことは、大きく3つの意義を有する。第1に、イラク国内の膨大な一次資料に基づいて、詳細な歴史的な事実が発見されたこと。第2に、今日のイラクにおいて、知識人がイラク・ナショナリズムの萌芽としての1920年暴動をどのように認識しようとしているのかを明らかにすることができる。つまり、彼らが組み立てる議論から、我々は、イラクの知識人がイラク再建に不可欠なナショナリズムをいかに構築しようとしているのかという問題の一端を見て取ることができるのである。第3に、2003年のイラク戦争以降の占領とそれに対して生じた国内の社会構造の変化を分析する際にも、ひとつの重要な参照理由となることである。(なお、1920年暴動にかんしては、シーア派宗教界のウラマーが重要な役割を果たしたことから、イスラーム運動の嚆矢として位置付けられることも多い)

ここまで同大会の代表的なセッションにかんしてまとめてきた。次に、全体の総括をしておこう。

同大会で最も印象的であったのは、数少ない出国の機会に、あるいは初めての出国経験というイラク人研究者が、自らの研究成果を生き生きと報告していたことである。彼らの研究蓄積は、膨大な一次資料に基づいている。また、2003年のイラク戦争後の政権と海外石油企業の癒着や腐敗問題に関する分析など、示唆に富む報告も多い。イラク国内で地道に研究を蓄積させてきた研究者との交流を深め、連絡を密にすることを約束したことの意義は、いくら強調してもし過ぎることはない。今後は、何らかの方法で彼らと共同研究を行うことが重要であろう。

そして、次回の第3回大会を2008年にロンドン大学SOASで開催することを確認し、現代イラク研究国際学会の発展と拡大を決意して大会は幕をおろした。また、イラク国内の大学とのプロジェクトに関する意見交換が、個別に行われた。

地域研究者にとって、研究対象とする地域の研究者と直接議論を交わすことは極めて重要であると冒頭で述べた。それは2つのことを意味している。第1に、研究者自身の研究蓄積を現地の研究者の前で報告することにより、情報・分析の正確さや議論の妥当性を見極めることができることである。第2に、共同で研究を推進することで、双方向的に膨大な情報の入手と整理が可能となり、地域の理解をより深めることが可能となることである。国内・地域・国際的に大きな問題を抱えたイラクを対象とする場合はとりわけ、現地の研究者と外部の研究者がそれぞれの得意とする分野を融合させ、かつ補い合う意義は大きい。

現代イラク研究国際学会が活発な活動を継続し、イラク研究が発展することを願ってやまない。報告者も、今後も引き続き積極的に同学会の活動に参加していきたい。